

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

少女魔術
ナイトフェイト
淫獄の
奇術師



小説 倉田シンジ

挿絵 七輝静樹

第一章 夜に舞う妖精

第二章 暗転する舞台

第三章 孤独の中に

第四章 妖精の堕ちる夜

登場人物紹介

Characters



くおんじ すずね 久遠寺 鈴音

レオタードを纏ったナイトフェアリーと呼ばれる少女怪盗。天才的な手品の腕を世のために使おうと義賊になる。快活でおっちょこちょいな性格。

り しんか 李 春華

カンフーを得意とする香港出身の婦人警官。スリルを味わうことと世直しを目的に、鈴音の相棒となる。ツインテールが特徴の気が強い少女。

フェル かみこうじ レイナ・F・神小路

日本屈指の資産家、神小路家の子女にして、鈴音のもう一人の相棒。イギリス人とのハーフで、三人の中で一番豊かな肉体を持つお淑やかな女性。

ロバート・ウエン 王

闇組織「インドラ」の幹部。

こうの さくぞう 河野 作蔵

強欲で好色な禿頭の政治家。ナイトフェアリーに恨みを持つ。

ひらまつ 平松

いつもナイトフェアリーに翻弄される警部。

身体からくたりと力が抜け、反らしていた背がベッドに落ちる。

肩で息をしながら目を落とせば、自分の乳房が二つ。いつものように存在している。

なのにその表面には、ミミズがのたくったような盛り上がりがある。その異物はさつきから乳首に吸いついて、どんどん吸引力を増していた。

(ちからがあ……抜けちゃうよお……)

これを心地よいというのだろうか。好奇心からのオナニーでさえ罪悪感に苛まれて最後までしたことがない鈴音にとつて、自分がこんなだらしない姿を見せているのが信じられない。信じたくもない。

「どうかな？ 話してくれる気になったかな？」

誰かが自分の顔を覗き込んでいた。涙の幕が邪魔をしても、それが誰であるかぐらいは分かる。ウォンがいやらしい微笑を顔に貼りつけているのも。

「……いや……」

ぼつりとすげなく答える。それが限界だったとも言える。

鈴音の声を合図にきゆうつとひとときわ強く吸引して、それからぶちゅつといやらしい音を立てて離れるゲル生物。

「きつ！ んふあ……！ ああ……ああう……」

ふるんと揺れる乳房を見ながら、少女は泣きそうな顔を屈辱にまみれさせた。

「もちろん、その答えも折り込み済みですがね……」

本当に嫌な男だ。少女はせめて心の中だけでは相手は鋭い視線を向ける。

「さて、次はどうするかな……。余裕もまだあるようですしねえ……」

独り言のように言って、ウオンの姿が視界から消えた。

(も、もしかして……やっとな……?)

彼女が待ち続けた瞬間がやってくる。

その期待通り、ゆっくりと動いたベッドが分婉台の変形を解いていく。続いて、カシユン、と軽い音が鳴って手足の拘束がベッドの中に引っ込んだ。

(あ、あせつちゃ……だめ……。まずは……カード、を……)

ほんの少しでいい。硬化カードで切りつけ相手を怯ませることができれば、そのわずかな隙に次の行動が起こせる。そのまま逃げるか、あるいは敵を倒して安全確保か……。

乱れた吐息を必死に整え、そっと動かした手を腰のスカーフに回す。

そこにあるカードの感触を確かめて、彼女はすかさず身を起こした。

「……っ!? あっ……!」

だがそのカードは、彼女にあるまじき失態によって床へと舞い落ちていく。

(え……? そんな……うそ……)

鈴音は一瞬絶望しかけ、しかしすぐに二の手を打とうとベッドから飛び退こうとした。

——つもりだった。

「はっ……!! あ……え……ううっ!!」

身体がふにやりと崩れ落ちる。ベッドの上から飛ぼうとした瞬間だった。

「う……あああっ！ なに……？ ひゃ、あああっ！」

無様にもベッドで四つん這いになって、少女はぐっと身体を丸めてしまう。

「貴女がまた逃げようとするのも折り込み済みですよ……」

ウォンの声。

（こ、これ……股間……？ ち、ちがう。おしり……お尻の中……あ！）

彼女の股間に貼りついていたゲルたちが、肛門の中に侵入していた。

カードを取り落としたのも彼女の失態ではない。瞬間的に肛門で蠢いたゲルの動きに、彼女の指が無意識レベルで震えてしまったからだ。そしてそのゲル生物をナノマシンの刺で操れたのはウォン以外にいない。すべて、見透かされていた。

「う、うあ……ああ……」

精一杯に刺激をこらえて、膝に力を込める。

震えながらも立ち上がった鈴音はしかし、半歩も動かないうちに再び崩れた。

「き、つやああああ！」

そして四つん這いにうずくまったまま、尻を上下に振り立てる。

笑い声が聞こえた。ウォンが笑っている。悔しいのになにもできない。足を動かそうとしても……それどころか自律的な行動すべてが起こせない。

ちゅ……じゅるるる……！ ぶちゅっ！

自分の尻から恥ずかしい音がする。股間周辺にあったゲル生物が、入り口の開いた肛門に殺到しているのだ。

「いひゃあ！ だめえ……っ、見ちゃ、い……や……あああっ！」

股間に貼りついたときから、すでにゲル個体は活動を開始していた。

ほんの少しずつ……身体の持ち主すら気づけないほどにゆっくりと肛門に染み入ったゲル液体は、コスチュームを通過したときと同じように肛門の中で半固体化した。

触覚の鈍い腸内に入り込んでしまえば、媚薬に毒された少女にそれを感知することはさらに難しくなる。腸の内壁を掃除するように這い進んだゲルの膜は、じっくり粘膜に媚薬を染み込ませながら機会を待った。彼女から一気に力を奪えるほど、身体が媚薬に浸されるのを。

そしてその効果が、ついさつき発揮されたのだった。

「だめえ……入っちゃ……うよおお……！」

菌を食いしぼり、ずるずると入り込んでくるゲルの感触に耐える鈴音。

肛門に力を込めようとしても、まったく門は閉まろうとしない。潜在的感度を限界まで

高められていた尻穴は、ゴムチューブほどの硬さの生物でさえ追い返すことができなかつた。ほんの少し内径を押し広げられただけで、ぱっくりと口を開いてしまっている。

「どれどれ……そんなに見てほしくないなら、見せてもらいましょうか？」

「ひ、ひゃ……！ お、おねが、……い……いやあ……」

ウォンが指を伸ばしても、少女はベッドに片頬をつけたまま震えて動けない。崩れた四つん這いで尻を持ち上げるようにして、男の指が股布にかかるのを見ているしかなかった。ずるりと脇に寄せられた股布の下から、ゲルの殺到する肛門が現れた。

「ほお、これは綺麗なお尻の穴じゃないですか……」

慇懃無礼が極まった言葉だった。

「ひゃあ……う、ううう……」

ぱっくりと開いた肛門は、白濁したゲルを通して透けて見えている。皺を伸ばして口を開けているそれは、腸粘膜の綺麗なピンク色すら透かせていた。

「ふうん……。二センチ……。いや、三センチほどですか。ぱっくり穴が開いてますよ？」

見えないであろう鈴音の羞恥心を刺激する、聞きたくもない説明。

「いつ、やあああ！ やめてっ、言わないで……。ひっ！ ううううっ！」

一瞬だけ身を起こしかけて、すぐにくんと崩れ落ちる。

(どおして……。？ こんなに……。お尻が……。ムズムズするのお……。？)

自分が惨めで、情けなくて、いつそのことこのままどこかへ消えてしまったかった。

ぶち……ずりゆ……ずらず……ぶちゆっ。

ぐちゆぐちゆと音を立てている肛門に、生硬いものが滑り込んでくる。肛門はきゅっ、きゅっとな縮しながら、全身に甘い痺れをまき散らすばかり。内側は内側で腸壁が揉みこねられ、隠されていた触覚をどんどん掘り起こされていく。

「はあ……ううっ、ひは……っ」

さっきまでの漠然とした快楽とは違う。腸内に感じるそれは心地よさとは異質でありながら、脳天を突き上げるような鋭い快楽を持っていた。

もぞり、尻の内側が蠢く。

「きひっ、ふああ……ううっ、んんっ……！」

一瞬で気力が削がれ、手足もじんと痺れて感覚が薄れる。

たとえるならそれは急性のアルコール中毒だ。体表からじつくり時間をかけて吸収された媚薬と違って、肛門からは一気に成分が吸収された。この媚薬は害を為さないが、脳は急激に麻痺させられる。正確には性感だけが異常に肥大化している状態だった。

「はあ……うううあ……んっ、ふあ……」

打開策もないままこうしていても、どうにもならない。それは麻痺した思考でも感じていた。だが、息をするだけでも精一杯で満足に指先さえ動かせない。

戸惑いに視線をさまよわせる鈴音に、ウォンは意地悪く囁きかける。

「どうかしたかな？」

(い、いや……逃げ、ないと……)

半端な抵抗が無為に終わるのであることを無意識に感じ取って、鈴音はせめて男から離れようと手足に力を込める。

ずり、ずりと、わずかにベッドの上を這いずって。鈴音は大きく息を吐き出す。

ただし、できるのはそれだけ。ベッドの縁に手をかけたところで、彼女は大きく背を反らした。長い髪が広がり、はらはらと宙に舞う。

ずりゆりゆりゆっ！

「あああああっ！ ひゃあ！ 入ってこない、でえ……!!」

下半身に群がるゲル生物たちが、待ちきれないといった様子で頭をねじ込んできた。

途端に硬直してしまう。身体はぴくりとも動かせない。なのに、高く掲げられた尻だけは淫らに振りたくってしまう。

「ふううっ、く、動いて……だめえ」

菊門がにゆうっとうと広がっている。そこに頭を突っ込んでいるのはひとときわ大きいゲルの塊。ラグビーボールを一回り小さくしたような細長い形状で、質量は仔猫ほどもありそうだ。いわゆるツチノコの形状が似ている。

「あ、ああう……ひつ、あ！ おねが、い……抜いてえ……！」

「それはできませんね。貴女が正直に話してくれるまでは」

ウオンの冷酷な言葉に絶望する少女の肢体が、ひとりでに揺れていた。

「抵抗しようとしても無駄ですよ。そんな生易しい媚薬じゃありません」

(ん、くうう……！)

ウオンがなにか言っているが、鈴音はそれどころではなかった。

アナルにめり込んでくる生物。それが一センチ、また一センチと潜り込むたび、下腹が震えるような疼きをお尻に感じてしまう。

これほどのものが逆流してくれば痛みも感じそうなものなのに、それがまったく細い肩はぶるぶる震えて、歡喜による痺れを如実に表してしまっていた。

肛門をわずかにめり込ませるようにして、胴体が呑み込まれている。門を閉じようとしてもそれは適わない。それどころか、無理に力を込めれば余計に悪い結果が待っているだろう。アナルの感覚を意識することで逆に力が抜けて、せいぜい侵入を早めるだけだ。

にゆる……ぶぶぶ……。

粘液まみれの物体が、ずりずりと入り込んでくる。ゲル生物の胴体をきゅつとくわえた肛門括約筋がひくつき、くすぐったさを百倍に強めたような感覚が湧き上がってくる。

「う、はああ……はあ、ふあ……」

先端三分の一ほどのところで、やっと侵入が止まった。カクカクと揺れて、ときおり瘻攀したように動きを止める尻から、ぶよぶよした白濁ゲルが垂れ下がっている。

「だ、だめ……これ以上……入らない……入れないで……」

腹部に感じる圧迫感は、意識すればするほど膨れ上がる。切迫感や緊張感、そういった追い詰められる感情が入り混じって心をかき乱していた。

鈴音の腕が無意識に動いた。

(うご……させる……。手が……)

わずかに背を反らして、泣きそうな目で背後を振り返る。

自分の腰と尻が見えた。少女は自分の腕を少しづつ這わせ、ゆっくりと持ち上げると自分の尻に載せる。精一杯の抵抗は、弱々しく震えていた。

ぶにゅっ……。

「んっ、ううう……！」

尻の谷間に頭を埋めた気色悪い感触があった。手が動かせると……、ならばこの物体を引きずり出すことができる——彼女はそう錯覚してしまった。

目を細めて、切なげな表情で……鈴音はそうと指を動かす。

手の平に感じるゴムの感触を、必死になって握り込んだ。ぐにやりと不確かな物体を固定して、そのまま引き——。

ずるるるっ！

「ひやあああつ！」

カエルのように股を広げ、無様にへたり込んでしまう少女。

少女の希望はもろくも崩れ去った。動きを再開したゲルツチノコが、魚が跳ねるような勢いでもってビチビチ動きだしてしまう。

(いっつ、やあああ……！ だめだめだめだめえ！)

お尻の穴にくすぶる疼きがぶわっと燃え上がり、少女は錯乱した。強烈な疼きは、手の届かない場所に生じた気が狂いそうな痒みに似ている。そして好むと好まざるとにかかわらず、それを掻き擦ってくれるのがもともと蠢くゲル状生物だった。

「だ、めっ！ ひやふあ！ くう……んんっ！」

やたらめつたらに指を動かして白濁生物を引っかく。ぬめる体表に滑ってなかなか掴むことができない。それでも一心不乱に、鈴音は指を動かした。

「はっ、はああ……ふうううう……」

産婦のように息を乱す少女の指が、ゲル生物に食い込んだ。

ぶちゅううっ！

途端に、破裂。胴体の後部を水風船のようにぶちゅうと飛散させたゲル生物は、その代わりに身体の前部を一気に跳ねさせ、門をくぐり、肛門道を押し広げて侵入した。

「おしつ、り……！ が……ああ……！！ ひやあああ！」

それが限界だった。鈴音の腕は力を失い、再度ベッドの上に丸まってしまう。

「うん、惜しかったなあ。……残念残念」

ウオンが手を動かさず。と、操作を受けたのかゲル生物たちは身体の蠕動を激しくした。

（ううあ！ もう、だめなのお……！！ 動かないで……！！）

ぎっと歯を食いしばって、目を閉じて、感覚を封じようと戦う鈴音の尻の上に、大小様々のゲル生物が集う。腰から尻、太腿にかけて、ナメクジのようにのたくり、吸いつき、貼りついてくる白濁ゲル。

肛門はそれら生物が侵入するたび、ぐにゅつと広がってはすぼまってを繰り返す。

「はあ……はあ……ふっ、あ……んっ！」

でたらめだった呼吸が、一定の間隔で整えられていく。すくんだ手足はぴくりぴくりと痙攣し、股間にじわりと熱い感覚が広がっていく。

かろうじて股布に隠れたヴァギナが、ひくついて愛液をこぼしていた。

「あつ、あ……う……ひんっ！ ううっ、ふあ……」

か細い声に変化が起きる。叫びが収まって断続的で小さな悲鳴になり、息は乱れている。どこか緩やかさを感じさせる呼吸に。唾液に濡れて赤く色づいた唇も、柔らかく開いて唾液の雫を垂らしていた。



思わず叫んでいた。

「なら、それを言葉と態度で見せてほしいですねえ。我々を喜ばせてくださいよ」

間髪入れずの声は、すべてを計算していたようだった。ウォンはソーマ酒のもたらす快楽の強制力と、それを最大限に利用する術を知っている。精神力では決して逆らえない身体の生理的な欲求を、獲物の籠絡に使用する術を。

「わ……わかったからあ……」

よろよろと伸びた腕をかわすウォン。嘲りを含んだ冷たい笑みで少女を見下ろす。

「分かってませんよ、言葉遣いになっていません」

立ち上がった男の股間が、檻越しの眼前に位置した。わずかに見上げる鈴音のすぐそばにペニスがそそり立っている。もう一度、喉が鳴った。

「わ、わかりました……。お願いします、それを……。オチンチンを……」

今度は避けなかった。鈴音の指がペニスに絡みつき、グローブ越しに熱い感触を伝えてくる。とくと胸が高鳴り、息がわずかに乱れた。

「ください……。鈴音が、気持ちよくさせてみせますからあ……」

よく考えてみれば、こうして異性の性器に触れるのは初めてだった。どうやって喜ばせればいいのか、少女にはいまいち分からない。

なのに、ペニスは何本もある。ウォンの隣に立って股間を突き出してきたのは河野、そ

の反対側にいるのもかつて盗みに入った先の家主だ。他の顔も確かに見たことがある。ナイトフェアリーのターゲットとして資料で見た顔、あるいは、実際に会ったこともある顔たちだ。なのに、自分が復讐されている立場なのだという実感が湧かない。今はただ、目の前のこのペニスたちを喜ばせることだけが頭の中に渦巻いていた。

「んむ……うっ、く……」

伸ばした舌で、ぴちゃ、と音を立てる。人狼から強制的にさせられたフェラチオを思い出しながら、必死で舌を踊らせた。

「そうそう。いい子ですねえ……」

褒められた途端、膣内がざわつと蠢いて愛液を押し出してきた。

（あ……なんか、気持ち、いい……）

こうして男に奉仕しているだけで、なぜか心地よさが高まっていく。

直接的な悦びではなくむしろ自虐的な……堕ちていく自分をもっと見てみたいと思ってしまう、いけない気持ち。自分で自分を追い詰める切迫感。

鈴音は左手のグローブから腕を引き抜いた。素手で肉棒に触れたいと、そう欲していた。伸ばした素手を他のペニスにあてがう。ねっとり絡みつくのは男の先走り汁。それを指先でこねるように、少女は手の平に亀頭を包み込んだ。

そしてグローブを着けたままの右手は自らの乳房にあてがう。亀裂の入ったスーツの下

に突っ込み、まだ布地に隠されていた乳肉を掬うようにして……。むにゅっとはみ出してきた乳房の量感にぼろぼろのスーツは耐えられず、ぴりぴり引き裂かれていく。

きつとこうすれば男たちも悦ぶに違いないと、鈴音は本能による直感で感じ取っていた。床に膝をついたまま、もぞもぞさせながら腰を上げる。

「んあ……。あふ……。う」

ふにゅっど弾けるように姿を現した乳房に、さっそくペニスが突き出される。

三本、四本……。檻の隙間から突き出される亀頭が、鉄格子に寄りかかった鈴音の身体に擦りつけられた。

ねとねとした感触と、その匂い……。彼らが汗ばんだ肌に塗りつけられていく。嫌悪感どころか、さらなる恍惚が少女を包み込む。

「はむ……。ん？ あんっ、ふ……。うう……。んっ」

亀頭を唇で挟み込み、ぬめる唾液で擦るようにして吸い込んでいく。尿道口の上に舌を置き、じゅるじゅると唾液ごとかき混ぜる。

ぴくっど震えたペニスに、彼女は目を細めてうっとりしていた。

（やっぱり……。こうされると、気持ちいいんだ……）

もぞもぞと太腿を摺り合わせる。歪んだ恥丘も擦り合わされ、ぞくりとした感覚がペニスに絡んだ指先を震わせる。膣道は早くペニスが欲しいと蠢いていた。

その欲求に背を押され、少女は自分の胸を持ち上げる。柔肉を胸元近くの男根に添わせ、谷間に挟むように擦りつけた。

「ひはっ！ ちくびっ……いい……。んむっ！」

一瞬だけ離された口から快感の吐息と言葉が漏れる。檻に密着して揉み込む乳房は、押し当てられた鉄の棒に柔らかく潰され、突き出される亀頭にくくにと突かれて、その間で翻弄される乳首にピリピリした感覚を発生させている。

「ひゅ……んむ……んん……っ」

端正な頬をもごもごと動かして、少女が男を見上げる。

上目遣いのその表情からは、羞恥も嫌悪も後悔も、完全に失われていた。手コキとパイズリとフェラチオをしながら、蕩けた目を細めて柔乳と指と舌とをペニスに這い回らせる。

「はふ……むぐ……気持ちいい、れふか……？」

もごもごと亀頭を含むその顔は、お世辞にも上品なものではない。ただ、匂い漂うペニスを必死に舐めしゃぶる表情は卑猥にして美しかった。

「おお、もつと喉まで入れて、口をすぼめて吸い上げるんだ」

「んぶ……んんっ、ふ、ぐむ……」

ぐぼつと呑み込んですぐに、言われた通り鈴音の頬がへこむ。じゅるるるっ！ といやらしい音が響いて口内では密着した舌が踊った。

「こっちももつとだ。乳首を強く擦りつけて……うっ、そうだ。いいぞお……」

胸い上げた乳房の先端にぶにと突き立った蕾で、亀頭がこしゅこしゅ擦られる。痼りを持った桃色の乳首がひしゃげ、潰れ、亀頭にキスを繰り返す。

「んんむ……ぐ、ふう……む……んっ……んんあ」

うっとりとした表情に浮かぶのは切なさど切迫感。早く男たちを満足させて、早くこの身体をいじり回してほしいという、淫らな欲望。

自然と手の動きも舌の動きも速くなっていく。ぴちゃぴちゃ、ずず……にちゃり。唇を丸く広げて陰茎を舐め回し、こねて柔らかくした乳房を擦りつけて、奉仕の悦びとさらなる快楽を求める。ぎこちなかった手コキの動きも、どんどんなめらかに艶めかしく。

「どうだ？ ワシたちのチンポは。おいしいだろう？」

「ふはあ……んっ、む……。はひ……。熱くて、にちゃにちゃ……して……とつても……むぐ、んっ、ふ……。おいひいです……んむ……」

少し口を離して、すぐにちゅぱつと唇で吸いついて。少女は相手の望む言葉を選び取る。「はふあ……んくっ、ふ……。あふ……！」

ぴちゃりと舐め上げた裏スジがぴくりと反応を返す。手の中のペニスも、胸に揉み込まれたペニスもぴくんぴくんと小さく跳ね始めていた。

(ああ……きつともうすぐ出るんだ……。せいえき……でる……の……)



霞がかつた頭でそれを考えると、なぜかゾクゾクしてしまふ。

鈴音が最後のひとがんばりとばかり動きを激しくしていくと……すぐに結果は現れた。

うっ、と呻いた男たちの男根がひくつく。

どぶどぶどぶっ！

手の中で跳ねたペニスに精液をまき散らし、宙を舞った白濁が上気した頬に降り注いだ。びちゃびちゃつとぶつかってゆっくり垂れ落ちる青臭い粘液。

「んふ……あ……んくっ！」

時を同じくして、乳房と口の中での射精も始まる。妙に熱く感じられる粘液が乳首に飛びかかり、口腔を満たした。

「はぁ……んぷっ……」

半開きになった唇が離れ、粘糸がつうつと滴り落ちる。むわりと立ちこめる青臭い匂いに、漏れ出る吐息は甘やかなものだった。

「はう……く、んっ……」

ぺたんと尻をついた少女は、唇から精液を垂らしながら呆然と男たちを見上げる。粘液まみれになった両手を、自分の股間に挟み込みながら。

「もお……だめえ……。おねがい……。早く……」

ぬめついた指先が、自らの愛液を掬ってさらなるなめらかさをもって陰核に当てられる。

ぶにとした塊をにゆるにゆる揉みこねる。反った背筋に電流が流れて、両腕に挟まれた両乳房はぐんにやりと形を変えて押し出されていた。

「……もつと、こう……お願いするにも作法があるでしょう？ 言葉遣いはもちろん、私たちの目も楽しませてくれないと。まだまだ私たちも満足してませんよお？」

少女の口腔で獣欲を満たされて、わずかに唇の端を吊り上げたウォンが言う。彼の言う通り、男たちはまだまだ満足していない者ばかりだ。

ぴくりと、鈴音の肩が震えた。

「はあ……はあ……、うう……」

乱れた息は収まる様子も見られず。鈴音は抑えようもなく自らの中に湧き上がる情動をどうすべきか一瞬だけ迷い、羞恥し、やがては欲望に従った。

のそりと持ち上がった尻の下で、にちゃり……愛液の粘る音がする。鈴音は荒い息を繰り返しながら、男たちに濡れそぼった尻を向けて這いつくばった。

「お願い……、ここを……いじってほしいの……」

ナイトフェアリーの、あるいは普段の鈴音の澁刺とした印象からはほど遠い、淫らで卑屈な動作だった。四つん這いになったまま、尻を男たちに近づけるため檻に押しつける。

冷たい鉄の棒がわずかに尻肉へめり込み、押し広げられたようにその狭間を広げた。私たちの眼下にあるのは、窄まって皺を寄せながらもひくつく肛門と、その下に口を広げた

(とはいえ……、はあ、んうう……実は、ちよつとキツイかもしれないかったり)

人ごとめいた視点で心の中に呟くが、実際は焦りと危機感でいっぱいだ。チャイナスーツのスリットから覗くスリムな太腿が、きゅつと閉じ合わせられてもじもじ擦り合わせられていた。にちゃりとしたものも、黒い薄レースの下着から滲み出てきている。

ウォンに指示されたのか、失敗バイオウエポンの触手がぐんつと張りを増した。

「ああ……！ はあ……く……、そ、それはオイタがすぎるだろ」

触手の一本一本が、どくと脈動して太さを増す。その中の一本が、必死の強がりや言う春華の太腿をこじ開けようと頭を内腿に擦りつけていた。

目を落とした先にある肉紐は周囲の触手と少しだけ形が違う。ひときわ太く、ひときわ醜悪で……視線で辿ると、それはイソギンチャク男の股間に繋がっていた。

本来男性器があるべき場所からは三股に分かれたペニス触手が生えている。その中の一本、亀頭をそのまま腫れ上がらせたようなわずかに先鋭型の先端が、ぶにぶにした感触で閉じられた肌を押しつけて隙間に潜り込もうとしていた。

鍛えられた筋肉を秘めたスリムな内腿を、ずりずりとくすぐってくるような感触。

似た感触が他にも湧き起こる。見れば、残りの亀頭触手はくねるように胴体を揺らしながら鎌首をもたげ、二つの乳房にそれぞれ這い進んでいた。

(んッ……あ……ううっ……！ いやいや、これくらいどうってことないって……)

自分を励ましつつも、一気に切迫感が増していく。自分の身体が思った以上に発情してしまっていることを感じて、春華もさすがに飄々とした言葉が続けられない。

体表からじわじわと浸透させられたソーマ酒は快感神経を過敏にし、意識的な努力では後戻りのできない道を春華に歩ませている。

「う……くううっ！」

力を込めて腕を引く。しかし触手に巻きつかれた腕は動かさず、関節を曲げることもままならない。逆に反動で腕を伸ばされ、身体を反らされて……わずかな太腿の隙間が無理やりこじ開けられる。触手はそれを見逃さなかった。

股間へにゆるりと滑り込んだ触手は熱く、ぬめぬめした胴体を下着に擦りつけてくる。

「き、気持ち悪いだけだな……っ、ひア!? う……ああ……ふっ」

語尾に彼女らしからぬ声が迸った。目が苦しげに細められて、声を抑えようと思わず嘸み締めた唇に血が滲む。それでも、反った身体は心地よさで細やかに震えて止まらない。

無駄な肉が極力削ぎ落とされた春華の身体は、恥丘の盛り上がりも鈴音に比べれば薄い。ただそのぶん反応もよく、媚薬の情欲に犯されつつある身体は陰核をぶくりと立たせていた。それが触手の動きによってくにと押し曲げられる。

触手はそのまま股間を突き抜け、片方の足に巻きついて、ドリルの溝のようにねじれながらずりずり前後に動いていた。腰がぞわりとした感触に包まれて勝手に痙攣してしまう。

いまさら太腿を閉じれば余計にクリトリスへと触手を押しつけかねず、春華は為すすべを失ってしまう。ぶくつと下着を持ち上げる痼りがじわじわと大きくなる。

「くう……！ つ……ん！」

秘裂に添うようにしつこく行き来する触手に逆らおうとするも、すぐに動きは封じられた。仰向けに転がされて足を取られ、左右に引っぱられる。

「んくつ……はあ……んんっ！ まだまだ……っううう！」

精一杯の強がりと言った途端、乳房の両脇と上下に触手が這い進んだ。

それがぎゅつと締め上げを強くし、肉を絞り上げる。柔肉が寄せ集められ、前に迫り出して、胸乳が一回り大きく見えていた。

胸のあたりに陣取っていたゲル生物がぶちゅつと潰される。しかし単細胞生物に近いゲルは死ぬということはなく、もぞりもぞりと蠢きながら肌の上に張りついていくばかり。さらにはそれを塗り広げるように、左右の亀頭触手がぶにぶにと柔肉をつつく。チャイナドレスにつんと浮き上がった乳首が、集的に揉みこねられていた。

乳房の中にじんつと広がっていく熱い疼き。

潤む腫が揺れた。ぎゅつと結んだ唇もわずかに震え、頼りない息を漏れ出させる。

「ふっ、ううう……はあ……はあ……はうッ！」

ほんの少し触手を動かされているだけなのに、呼吸はみるみる乱れていく。抑え込めて

いると自分では思っていた感覚が、次から次に胸へ湧き出てくる。

大きく揺らされるノースリーブの肩でも、痛いほどに絞られた乳房の上でも、たくさんの触手たちは行動を再開している。それらの感触は一瞬でくすぐったさを通り越して、身悶えしそうな快感を生み出しつつあった。

ぴちゅ……ちゅ……ぷ。

ショーツに隠された股間に、熱い愛液が溢れる感触があった。お漏らししたようにじんわり温かな感触を感じて、すくめられた肩がぴくりと動く。

(う、あ……！ 鈴音に……会うまでは……これくらいのこと……んうっ！)

不本意ながら捕まってしまった以上、鈴音を助け出すことが彼女の使命だった。レイナだって、無事に逃げおおせていればすぐに自分たちの助けを画策するはずだ。ならば自分は内側からこの建物を探り、あわよくば鈴音と一緒に逃げようと……。

「んあぁっ、あは……っ、ふうあ……」

ふるつと震えた頬が緩み、甘い吐息を漏らしてしまう。

(そこまで……あ、甘くなかった……かな?)

ぐいと持ち上げられた自分の腰を潤んだ瞳で見つめて、春華は心の内で自嘲してみせた。気持ちいい。とても。

それは否定できない——どころか、流されてしまいそうなほどだ。媚薬めいたものを使

われたのは感じていたが、いざ刺激を受けてみるとそれは抗いがたい誘惑だった。

服がびったりと貼りつくほどの汗に汗が噴き出る感覚が心地よい。心臓が激しく跳ねれば跳ねるほどに息苦しくなるのに、漏れ出る吐息は欲情に甘く彩られて。左右に広げられた股間は、じくじく疼いて涎を垂らしている。

性に疎い鈴音をからかっていた彼女も、実際の男性経験は一人だけ。故郷にいる年下の幼馴染みとの性交渉は数えるほどしか経験がない。感覚は火照った身体を一人慰めるオナニーとも違った。与えられる快感が違いすぎた。

（ただ……触られてるだけだつてば……こんなの、触られて……んんんっ……）

いくら自分に言い聞かせても、力や気力が抜けていく。身体を内から温められる緩やかな快楽とは質の違う、鳥肌が立つような鋭い感覚が押し寄せてくる。相手は人外の生物だというのに、それでも心臓は快感の刺激で勝手にときめいて肉を疼かせてしまう。

隣の部屋の男——ウォンがこの施設の支配者であろうことは、なんとなく想像がついた。春華は男を睨みつけて、敵意と憎しみで必死に自我を保とうとするが……すぐにビクンと身体を跳ねさせ、苦しげに目を伏せてしまう。

「この……やろ……っあ！ んっ……」

股間の蜜肉がきゅんっ！ と疼く。

邪魔なドレス裾が脇に押しつけられて、広げられたスリットから恥丘が丸見えになって

いた。大人びた黒い下着は重さを感じさせるほどにじっとり濡れている。

その上を行き来する肉棒が、敏感な秘裂をじわじわ押し開こうとしていた。

太腿を周回した亀頭触手の先端が、再び恥丘の膨らみに戻ってくる。それは自分の胴体をよけさせて、春華の恥穴に頭を突っ込ませた。

「じよ、冗談はやめてほしい……んだけどな……ううう！ くっ、んんんっ！」

下着を破らんとするように、直角に近い角度でヴァギナへ頭を擦りつける。敵意によって活性化したはずの理性はまたも頭を引っ込め、黒下着はじゅわっと愛液を絞り出しながら大きくへこんで恥裂の間に触手を潜り込ませている。

割れ目に引き込まれたぶんのショーツが引き寄せられ、股布の幅が減少。

「っ！ ふ……うあ……！ ご、強引なのは嫌われるぞ……！」

無理やりの突入にもかかわらず、大陰唇の膨らみは大きく割れて亀頭部分を挟み込んだ。下着越しの膣口もわずかに内側へ広げられ、微妙に引きつりながらつばっている。その緊迫感が、なめらかな肌に汗を浮かせる快楽に転化する。

ギリギリと巻きつくその他の触手が、火照る身体をきゅつと締めつける。腕や胸や足に、触手にぐるぐる巻きつかれる姿はまるで緊縛されているようだった。

「まったく……くふ……んっ、これくらいで、この……春華が……っ」

特に乳房はきつい。張りのある乳肉が寄せ集められ、押し出されて……ゴム鞠のように

跳ねさせられる。ちりちり痺れる痛みが、つつかれる乳首を中心に全体へ広がっていく。

「んっ!? はあ……はあ……あ……あ……?」

その締めつけがふわりと緩んだのを感じた春華が大きな吐息をついた。途端、ぶしゅっ! じゅじゅじゅっ! びゅるびゅる!

感覚を共有する三本のペニス触手が射精していた。

まるで小便のように勢いがよく大量の精液だった。それらが股間に、あるいは胸から顔にかけて降り注ぐ。ねとりとしたものが頬を濡らしていく。

大きくしなった一本の触手が、春華の唇にキスをしてきた。

「んうう! くふ……! うううっ!」

白濁を拭うような動きで、粘液を垂らす触手が口腔を押し広げる。激しい息で半開きになつていた唇はあっさりと開かれ、歯列を閉じる間もなく侵入されてしまつていた。

「ぶふあ……んっ、んむん……ぐ!」

異形だが、その匂いは紛れもなく男のものだった。生臭くて嫌悪感を催させるのに……火照った胸を甘美にくすぐる匂い。それが被虐の悦びを刻み込もうとする。

「ごほっ! ぷはあ……んく、んっ!」

一度は押し出した触手が、白濁をまき散らしながら再び潜り込む。息もやっとの醜態を晒しながらも、春華は必死に口を閉じようとしていた。



なのに腰はますます持ち上げられて、足は大きく広げて押しやられ、柔軟な彼女は見たくもない光景を目の前に突きつけられてしまう。

口腔を入りして目の前にのたくる触手。乳房を締めつけ、乳首の尖りを何度もつついてくる触手。そして白濁まみれに穢された股間に、しつこくねじり込もうとする触手。

下腹の奥、むずむずした感覚が抑えきれない。

ヴァギナから逆流しているように見える白濁の奔流とその感触は、下腹部へと如実に伝わって身体全体を痺れさせた。

もごもごと口を蠢かせ、涎まみれになりながらも口腔から触手を押し出そうとする春華の胸元、乳首が亀頭に押し込まれている。股間の秘所と同じく突進してくる亀頭は、乳首の蕾をひしゃげさせてぐりぐりこねくり回してくる。

「んう！ ひゃ……ぶぶっ！ ごほ……！」

やっこのことで触手を吐き出しても、無様に咳き込んだ瞬間にまた侵入。

身動きも封じられ駄々つ子のごとくただ身体を揺さぶる抵抗をするだけだ。その視界が苦しみの涙に潤んで、視覚までもがあやふやにされつつある。

ぶよぶよした触手に肌をのたくられる触覚が強調され、それに合わせて心を浸食していく。快楽も増加していく。

（や、やばい……っ。これ……このままだとっ、んうっ、ふはぁ……！ で、でも……

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>